

日本詞華集

西郷信綱

安東次男

廣末保 共同編集

未來社

日本詞華集 奥付

一九五八年四月一〇日 第一刷発行

定価 一、〇〇〇円

編者 西郷信綱・安東次男・廣末保

発行者 西谷能雄

印刷者 鈴木才治

(鈴屋印刷所)

製本者 橋本保三

(橋本製本所)

発行所 東京都文京区表町七八番地

株式会社

未 來 社

振替 東京 八七三 八五番
電話 (九二九) 〇六九 六四番
(九二九) 〇四六 四四番

検印廃止 落丁・乱丁本はおとりかえします

凡 例

本書は、わが国の古代から近代に至る詩作品のなから、三人の編者の共同責任において選択し、編纂し、収録した詞華集である。

本書は、古代・中世・近世・近代の四篇に分けて時代順に配列し、わが国の詩の推移、変遷もあわせて概観できるように意図した。

各篇は、歌謡・和歌・連歌・俳諧・近代詩・短歌・俳句の各項目別に一括整理して、鑑賞上の便宜をはかった。

収録作品は、用字、仮名遣いともすべて原典どおりとした。ただし、明らかに原作者の誤用と思われる箇所については、原作の趣きを損わぬ場合にかぎり、二、三改めたところがある。

ルビは、読みの上で、とくに必要と思われるもののみ、原典の仮名遣いに準じて付した。近代篇のなかで、とくに原典総ルビの作品については煩雑さを避けるため適宜削減した。

近代篇でルビに特殊な読みを採用した場合は、脚註において、編者ルビ、原典（作者）ルビの別を明らかにした。本書の性質上、六ボ脚註は、最小限必要と思われる程度にとどめ、本文中に*印をもって示してある。

各種の原典によって原文に異動がある場合、またはいく通りもの読みがある場合は、編者において選択し、鑑賞上残した方がいいと判断されるものについてのみ、本文中にルビをもって（ ）で示すか、または脚註において（ ）で示した。

和歌・俳句等における詞書は、作品理解の上で不可欠と思われるもののみを残し、作品が独立して鑑賞できると思われる場合には除いた。

芭蕉・蕪村の項にかぎり、春・夏・秋・冬の四季に従って配列し、さらにそれらを時・天・人・動・植の順に分類整理してある。

若干の例外をのぞいて、近代篇編纂の最下限は、一九三〇年ごろまでとした。

日本詞華集

目次

古代篇

歌謠

記紀歌謠

三

風土記

八

神樂歌

九

催馬樂歌

三

雜

五

琴歌譜・佛足石歌・百石讚歎
東遊歌・風俗歌・土佐日記

和歌

萬葉集

六

古今集

六

伊勢物語

七

後撰和歌集

三

拾遺和歌集

三

後拾遺和歌集

七

金葉和歌集

七

詞華和歌集	九
千載和歌集	八
和泉式部	七
紫式部	六

中世篇

和歌

新古今集	五
西行	四
建禮門院右京大夫	三
藤原定家	二
源實朝	一
百人一首	〇
玉葉和歌集	二六
風雅和歌集	二五
正徹	二四
連歌	二三
菟玖波集	二二
竹林抄	二一

新撰菟玖波集……………一五

水無瀨三吟百韻……………一四〇

宗祇發句……………一四

犬筑波集……………一三

歌謠

梁塵祕抄……………一三

唯心房集……………一四

田植草紙……………一四

狂言小歌……………一四

室町時代小歌……………一五

閑吟集……………一四

近世篇

俳諧

蕉風以前……………一五

芭蕉……………一六

蕉門……………一六

蕉村……………一六

一茶……………一六

天明以後……………100

和歌

賀茂眞淵……………105

香川景樹……………105

橘曙覽……………107

良寛……………111

木下幸文……………114

平賀元義……………115

歌謡

隆達節小歌……………117

山家鳥蟲歌……………116

松の葉……………116

落葉集……………119

近代篇

近代詩

小學唱歌集……………113

於母影……………113

竹友藻風	高村光太郎	永井荷風	木下杢太郎	石川啄木	三木露風	北原白秋	森鷗外	岩野泡鳴	河井醉茗	伊良子清白	上田敏	蒲原有明	薄田泣菫	中學唱歌	與謝野鐵幹	土井晚翠	島崎藤村	國木田獨步	宮崎湖處子	北村透谷
.....
二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五

丸山薰	三好達治	田中冬二	富永太郎	北川冬彦	伊藤藤整	梶井基次郎	萩原恭次郎	竹内勝太郎	宮澤賢治	吉田一穂	佐藤春夫	西條八十	堀口大學	佐藤惣之助	千家元麿	大手拓次	室生犀星	萩原朔太郎	山村暮鳥	日夏耿之介
三〇	三五	三八	三八	三六	三七	三五	三〇	三一	三〇	三六	三五	三三	三一	三六	三七	三四	三六	三五	三五	三五

俳句

齋藤茂吉.....四三〇

北原白秋.....四二七

前田夕暮.....四三〇

吉井勇.....四三一

木下利玄.....四四四

中村憲吉.....四四六

古泉千樗.....四四三

折口信夫.....四四三

會津八一.....四四四

窪田空穂.....四四七

川田順.....四四九

土屋文明.....四五〇

吉野秀雄.....四五二

正岡子規.....四五五

内藤鳴雪.....四五七

河東碧梧桐.....四五八

高濱虛子.....四五九

村上鬼城.....四六一

渡邊水巴.....四六三

古
代
篇

歌謠

記紀歌謠

古事記*

八雲立つ 出雲八重垣
妻ごみに 八重垣作る
その八重垣を*

八千矛の 神の命は
八島國 妻枕きかねて
遠々し 高志の國に
賢し女を 有りと聞かして
麗し女を 有りと聞かして
さ婚ひに 在り立たし
婚ひに 在り通はせ
大刀が緒も いまだ解かずて
襲をも いまだ解かねば

嬢子の 寐すや板戸を
押そふらひ 我が立たせれば
引こづらひ 我が立たせれば
青山に 鶯は鳴きぬ
眞野つ鳥 雉は響む
庭つ鳥 鶏は鳴く
慨たくも 鳴くなる鳥か
この鳥も 打ち止めこせね
いしたふや 海人馳使*
事の 語り言も こをば

赤玉は 緒さへ光れど
白玉の 君が装し
貴くありけり

沖つ鳥 鴨着く島に
我が率寝し 妹は忘れし
世の盡に

(上段)

*七一五(和銅五年、太安万侶撰録。

**結婚の新室はぎの歌。

(下段)

*以下二行は海部の語りごとであることを示すおさめの言葉。